

メルマガ 「いいテク・ニュース」 季語に遊ぶ 2020 年 11 月 18 日 (Vol.162)

「歌川広重『東海道五拾三次』保永堂版と俳句一其ノ式 三島から岡部まで」

「歌川広重『東海道五拾三次』保永堂版と俳句一其ノ式 三島から岡部まで」



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Memorial_Portrait_of_Hiroshige,_by_Kunisada.jpg

広重の死絵（三代目歌川豊国筆、安政5年（1858年））

歌川広重『東海道五拾三次』の二回目です。

まず、初回に紹介できなかった広重の略歴を紹介します。

広重は寛政九年（1797年）、幕府定火消（じょうびけし）同心職の安藤家の長男として江戸八代洲河岸（やよすがし、現在の千代田区丸の内2丁目、明治生命館付近）に生まれました。

文化六年（1809年）二月に母を失い、十二月には父も失い、いまだ十三才でしたが家職を相続します。

幼少のころより絵を好んだというエピソードもあり、文化八年（1811年）ころに浮世絵師歌川豊広に入門して豊広の一字「広」を譲り受け、「広重」の画号を名乗ります。

いわゆる下層の武士は、浮世絵師に入門することも行なわれていたようです。

文政六年（1823年）に定火消同心の職を子に譲り、作画に専念します。

当初は美人画や役者絵を描いていましたが、天保二年（1831年）ころに『東都名所』の傑作十枚を発表し、風景画に開眼し、これに続く『東海道五拾三次』保永堂版によって人気絵師の地位を確立しました。

安政五年、画業の集大成としての連作浮世絵名所絵『名所江戸百景』の制作中にコレラで没するまで風景画の第一人者として活躍し続けました。

上の浮世絵は、美人画に優れた三代目歌川豊国が描いた『広重死絵』です。

なかなかの男前です。

死絵（しにえ）とは人気のあった歌舞伎役者や絵師、戯作者（げさくしゃ）などが死亡した時、その訃報と追善を兼ねて版行された浮世絵のことです。

では三島から岡部までの旅をお楽しみください。

12. 三島 朝霧



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Tokaido11_Mishima.jpg

東海道五拾三次之内 拾壺番目 三島 朝霧

旅は箱根を越え、当時の伊豆国（いずのくに）、現在の静岡県に入ります。朝霧が立ちこめる三島の宿を旅立つ人々を幻想的に描きあげています。画面中央に描かれた駕籠（かご）に乗る人や馬上の人は、早朝の出発のためか再び睡魔におそわれて居眠りしています。背景は霧に煙り、シルエットとして描かれ、左端の巡礼たちの姿など、手前から奥に進むにつれてシルエットは淡くなり、遠近感をも表現しています。なお、シルエットの鳥居は三島大社です。輪郭をぼかしたモチーフは、宿場や街道が眠りから覚める前の静寂を表現する狙いなのでしょうか。中央の旅の一行のみはシャープな線で描かれていますが、三人は笠で顔を隠していて、押し黙った感じがさらに静寂を演出しています。

朝霧や瞼おもたき馬の上（瞼＝まぶた）

加舎白雄（かや しらお）（1738-1791）

季語＜朝霧＞で三秋

1 3. 沼津 黄昏図



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Tokaido12_Numazu.jpg

東海道五拾三次之内 拾貳番目 沼津 黄昏図

黄昏時、木の間からまんまるな月が昇り、旅人たちの足どりも夜が来る前にと急ぎ足になります。逆「く」の字に曲がる道は狩野川（かのがわ）沿いの堤で、その先には三枚橋が架かり、橋を渡ると沼津の宿です。

絵の主役は中央の三人で、前の二人連れは比久尼（びくに）です。

比久尼は女性の僧侶で熊野信仰を広めるために諸国を巡っていました。

天狗の面を背負った男は金毘羅参りの途中で、白木綿の襦袢（じゅばん）を着て、股引や脚絆、足袋も白です。

信者から米や賽銭（さいせん）を集めて金毘羅大権現に参詣し、背負っていた天狗の面を奉納していました。

旅人が表情を見せない中、天狗の面だけがこちらを向いて月の真下に描かれているのが印象的で、画面中央から右の部分には白っぽい色を多用し、左側に深い森の暗闇で画面のバランスを図っている広重の構成力が観てとれます。

天狗泣き天狗笑ふや秋の風

正岡子規（まさおか しき）（1867-1902）

季語＜秋の風＞で三秋

1 4. 原 朝之富士



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Tokaido13_Hara.jpg

東海道五拾三次之内 拾参番目 原 朝之富士

沼津の黄昏図から一転して、朝の富士が雄大な姿を見せ、山頂が枠からはみ出しています。右手前は愛鷹山（あしたかやま）でゴツゴツした山の様が硬い線で描かれ、「小田原」や「箱根」の山岳表現と共通しています。

対して沼地に番（つがい）の鶴を描くことで山岳の威圧感を和らげる効果も忘れていません。

登場人物の母娘（おやこ）はお揃いの八つ藤の濃藍の浴衣を塵除け（ちりよけ）に用い、小袖と帯のピンクが映えています。

富士も朝日を浴びて、ほのかにピンク色に染まり、画面上の一文字引きもピンクです。

この版では雨天は黒、晴天は藍というように一文字引きの色を変えていますので、そこに注目して鑑賞するのも一興です。

この絵のように浮世絵版画などには、しばしば旅を楽しむ女性の姿が描かれています。

女性のみの旅に危険がはらむのはいつの時代も変わりなく、当時は供（とも）をつけるのが基本でした。

この絵の供は旅行荷物などを入れた挟箱（はさみばこ）を天秤棒（てんびんぼう）にかけて従っています。

彼が羽織っている半纏（はんてん）は広重の「ヒロ」を組み合わせた模様で絵師・広重の小粋な宣伝をも描き込んでいます。

ここでは画面の枠をはみ出している富士山の美しさ、大きさを詠んだ句を選びました。

赤富士の天に小鳥の微塵かな（微塵＝みじん）

上野泰（うえの やすし）（1918-1973）

季語＜赤富士＞で晩夏

夏の朝、朝焼けによって赤く見える富士をいいます。

15. 吉原 左富士



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Hiroshige15_yoshiwara.jpg

東海道五拾三次之内 拾四番目 吉原 左富士

江戸から京都に向かって進むと、吉原宿の手前で街道が右に折れ富士山が左側に見えます。これを左富士といい名所として知られていました。

画面は手前の松を大きく描き、蛇行する街道を次第に小さく配して遠近感を出しています。

広重は後ろ向きの人物をよく描いていて、ここでも四人はみな後ろ向きです。

「沼津」における後ろ向きの人物はもの寂しそうに表現されていましたが、この「吉原」では明るい雰囲気を感じられます。

それは昼間の風景であることと、子供たちの健康そうな様子が伝わってくるからでしょう。

三人の子供たちが乗る馬の背に一人、左右に二人のタイプの鞍を三宝荒神（さんぼうこうじん）と呼びます。

三宝荒神とは日本の仏教における仏と法と僧の三宝を守り、暴力や悪を退治するために荒々しく怒っている顔をしている佛神です。

馬に乗った三人の子供のうち二人が松の間から見え隠れする富士山を背に伸ばしてのぞきこむような様子と右の一人は居眠りしているようで、かえってリアルさを演出しています。

子供たちの顔が見えないことで、逆に彼らの元気そうな声が聞こえてきそうです。

絵では左富士と田んぼの中の松原ですが、ここでは左富士と静岡名産のお茶を詠んだ句を選びました。

茶の花の中行く旅や左富士

正岡子規（まさおか しき）（1867-1902）

季語＜茶の花＞で初冬

16. 蒲原（かんばら） 夜の雪



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Hiroshige16_kanbara.jpg

東海道五拾三次之内 拾五番目 蒲原 夜の雪

しんしんと降る雪に街道も宿場も山もすっぽりと覆われ、すべてを静寂が包みこみます。

その静けさの中、三人の人物が登場しています。

右の二人連れは菅笠（すげがさ）や蓑（みの）や合羽（かっぱ）に雪が積もっていて、雪の中長時間歩いていることが暗示されています。

傘を半開きにした老人らしき人物は背を丸め、杖をつき、足には雪下駄で慎重な足取りです。

夜景の絵で人物の表情が見えないのは「沼津」と同じで感傷的な気分を呼び起こします。

この絵の成功の要因は更けてゆく雪の夜の静けさと雪明かりの風景を墨の濃淡のみによって表現しているところです。

これにより登場人物の着衣などが浮きあがらせています。

右に行く二人連れと左に行く老人がすれ違い互いに背を向け、画面の外へと進んでいく配置が宿場を起点とした旅の形を表現しています。

雪に包まれた静かな街道という情景を描いていますが、絵の舞台である静岡県蒲原は温暖な気候なので、広重のつくり出した虚構の世界と考えられています。

实景にこだわらず、発想のまま描いた保永堂版五拾三次の中で傑作の一つです。

しはしはと降るに音あり夜の雪

松岡青蘿(まつおか せいら) (1740-1791)

季語<雪>で三冬

17. 由井（ゆい） 薩埵嶺（さったれい）



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Tokaido16_Yui.jpg

東海道五拾三次之内 拾六番目 由井 薩埵嶺

「薩埵嶺」とは通常「薩埵峠」と呼ばれる難所ですが、峠を越えた先に富士山と駿河湾を一望できる眺めは五拾三次中最も美しい絶景として知られていました。

広重は自然景の中に人物を登場させ、単なる名所絵から脱皮をはかっています。

画面左上の切り立った崖の上に二人の旅人がいます。

小手をかざす男は顔を前に突き出してへっぴり腰ながら富士と駿河湾の眺望を満喫しています。

その上を薪（まき）を背負った樵（きこり）は黙々と坂を上って行きます。

この絶景も地元の者にとっては、もはや見飽きた風景なのでしょう。

同じ風景を見ても土地に生活する者と旅人では感じ方が違います。

これも人生の本質です。

構成もこの絵の見どころです。

画面左上から右下に対角線を引くと、岩肌をあらわにした山道の険しさと、波静かで広々とした駿河湾と空からなる開放的な空間を対比させ、画面を立体的に見せることに成功しています。

これも傑作の一つです。

ここでは「絶壁」を詠んだ句を選びました。

絶壁にもたれて杣の今朝の春（杣＝そま）

川端茅舎（かわばた ぼうしゃ）（1897-1941）

季語＜今朝の春＞で三春

18. 興津（おきつ） 興津川



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Hiroshige18_okitsu.jpg

東海道五拾三次之内 拾七番目 興津 興津川

旅は由井宿を出て興津宿の手前の興津川です。
 旅人として異色の相撲取りを登場させています。
 相撲取りは二人とも柄袋（つかぶくろ）をかぶせた刀を腰に差しているので、大名お抱えの関取かと思われます。
 現在は興行で行なわれている相撲ですが、江戸時代はすべて勧進相撲でした。
 勧進相撲とは、社寺の建築などの資金集めのために相撲を開催し、木戸銭をこれにあてることをいいます。
 そのため相撲の開催には寺社奉行の許可が必要でした。
 番付表に「蒙御免（ごめんこうむる）」とあるのは、奉行の許可を得ている証（あかし）で、現在もそれが名残として記されています。
 興行は江戸・京・大坂が多く、力士はほとんどが諸藩のお抱えで保護と扶持（ふち）を得ていました。
 この絵は江戸から京都か大坂への移動中なのでしょう。
 駕籠の中の力士は自分の体重で駕籠が壊れないかと心配げに見ています。
 一方、馬に乗る力士は巨体をどっかりと馬の上に置き、前を見て川を渡るのを楽しんでいるかのようです。
 構図としては視点を低く取り、水平線の上のピンク色がうららかな天候を示し、画面左の松の生えた岩山のせり出しが景色に変化を与えています。
 ここでは相撲を詠んだ句を選びました。

脇向て不二を見る也勝相撲

小林一茶（こばやし いっさ）（1763-1828）
 季語＜相撲＞で初秋

19. 江尻 三保遠望



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Hiroshige19_ejiri.jpg

東海道五拾三次之内 拾八番目 江尻 三保遠望

江尻は現在の清水港です。

徳川家康が埋葬された東照宮のある久能山から清水港、愛鷹山（あしたかやま）、箱根、伊豆半島まで眺望し、中ほどに羽衣伝説で有名な三保の松原を黒々と描いています。

画面手前には帆をおろした舟を二列に並べ、右肩あがりの線を目で追っていくと白帆の舟が次第に小さくなり、水平線上には消えゆく寸前の帆が遠近感も巧みに表されています。

行き交う舟の多さから活気が伝わってきますが、このシリーズには必ずといっていいほど、おのおのの宿場に立ち寄る人々や街道を行く旅人が描かれていますが、この絵には小舟の上に点のように描かれたのみで、他の絵のような重要な構成要素にはなっていません。

しかし、密集した集落の屋根とその上に干された漁網が描かれ、広重の人々の営みに対する関心の高さを示しています。

江尻は日本橋から約四十一里の地点で、五拾三次全体のほぼ三分の一を経過しました。

ここでは羽衣伝説にちなんだ句を選びました。

汐風や羽衣の松花さきぬ

正岡子規（まさおか しき）（1867-1902）

季語＜松の花＞で晩春

20. 府中 安倍川



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Hiroshige20_fuchu.jpg

東海道五拾三次之内 拾九番目 府中 安倍川

『保永堂版』には渡しが繰り返し登場します。

この安倍川では三組のグループを描いてそれぞれ違った川越しをさせています。

手前は女性三人連れと供の男で、川の深さは人足たちの胸まであり、駕籠の中の女性は座布団をしっかりつかみ、川を見る表情も心配げです。

三人の女性の供と思われる人足に肩車をされている羽織の背中には「丸」に「竹」の字が染め抜かれています。

これは保永堂の版元竹之内孫七（たけのうち まごしち）の名にちなむものです。

このような広告が保永堂版には随所にしかけられています。

対岸から馬に荷物を乗せて三人の人足のグループが渡ってきています。

重い荷を担がされて馬が流れに脚をとられて思うように進まないのを、右の人足は馬を直進させようと手綱をぐっと引張っている表情がうまくとらえられています。

彼らのやや後方には、みずから歩いて川を渡る客とそれを導く人足の五人組がいます。

輦台（れんだい）や馬がないため歩きやすそうです。

渡しの場面でも登場人物の心持ちや振舞いを広重はきめ細かく描いています。

ここでは渡し舟を詠んだ句を選びました。

菜の花の中に川あり渡し舟

正岡子規（まさおか しき）（1867-1902）

季語＜菜の花＞で晩春

21. 鞠子（丸子、まりこ） 名物茶店



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Tokaido20_Mariko.jpg

東海道五拾三次之内 式拾番目 丸子 名物茶店

「名ぶつとろろ汁」の立て看板を立て、軒下には「御ちやつけ」、障子にも「御茶漬」「酒さかな」とあります。

有名な鞠子の茶店の風景です。

蕨茸きの店先では、二人連れの旅人が縁台に腰かけ、名物のとろろ汁を美味しそうに食べています。この二人の客は十返舎一九（じっぺんしゃ いっく）（1765-1831）のヒット作『東海道中膝栗毛』の弥次喜多道中のイメージが重ねられています。

軒先の右手には焼き魚に串を刺した巻蕨、左側には干し柿が吊り下がっていて、これらが客に供されていたようです。

とろろ汁は、自然薯（じねんじょ）や長芋、大和芋をおろし金でおろし、さらに鉢で摺（す）ったものに出し汁を合わせ麦飯にかけて食べます。

この絵ではそれを茶漬けがわりに酒の仕上げとして食べているようです。

広重は飲食の楽しさとともに、庭先に咲く梅の花、のんびりと歩いている農夫も含めて春の気分を醸し出す明るい薄紅色で巧みに画面処理しています。

現在でも、鞠子（丸子）は「とろろ汁」が名物で、老舗料理屋の「丁子屋（ちょうじや）」ではとろろ汁、麦めし、味噌汁のセット料理が提供されています。

ここでは有名な芭蕉の句を選びました。

梅若菜まりこの宿のとろろ汁

松尾芭蕉（まつお ばしょう）（1644-1694）

季語＜梅＞で初春

22. 岡部 宇津の山



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Hiroshige22_okabe.jpg

東海道五拾三次之内 貳拾壺番目 岡部 宇津之山

街道に青緑色の斜面が両側から迫ってきています。
 段差をつけて流れ落ちているのは急流岡部川です。
 峠の向こうからは薪（まき）を背負った樵（きこり）が姿を見せ、奥の方から手前にかけて人物が徐々に大きくなり、最後の方は胸から下が隠れることで、峠を越えてくる感じが伝わってきます。
 一方、画面下の方から、後ろ姿の男女が坂を登ってゆきます。
 絵を観る者もこの二人とともに峠を登り、下ってくる樵たちとすれ違ってゆくような気分にさせてくれます。
 画面には描かれていませんが、右側の山中に険しく細い山道があり、それが『伊勢物語』の一話の舞台として有名な「蔦（つた）の細道」です。
 一带は「宇津の山」と呼ばれ、在原業平（ありわらの なりひら）（825-880）が
 「駿河なる宇津の山べのうつつにも夢にも人にあはぬなりけり」
 と詠んでいます。
 ここでは「蔦の細道」にちなんで蔦を詠んだ句を選びました。

蔦の葉は昔めきたる紅葉かな

松尾芭蕉（まつお ばしょう）（1644-1694）
 季語＜蔦の葉＞で三秋

私も沼津の「黄昏図」と岡部の「宇津の山」から発想を飛ばして詠んでみました。

鬼の手か羅生門かづら咲く峠

白井芳雄

季語＜羅生門かづら＞で晩春

今回は「歌川広重『東海道五拾三次』保永堂版と俳句一其ノ弐 三島から岡部まで」をお届けしました。

全体を通じての参考文献、出典：安村敏信・岩崎均史著

『広重と歩こう 東海道五十三次』（小学館）（2000 年）
ISBN4-09-607001-7

町田市立国際版画美術館監修・佐々木守俊解説
『謎解き浮世絵叢書
歌川広重 保永堂版 東海道五拾三次』（二玄社）（2010 年）
ISBN978-4-544-21201-3

小林忠・前田詩織解説
『歌川広重 東海道五十三次五種競演』（阿部出版）（2017 年）
ISBN978-4-872-42443-0

新田時也編著・志田威・中澤麻衣著
『東海道・中山道 旅と暮らし』（静岡新聞社）（2019 年）
ISBN978-4-783-81091-9

飯田龍太・稲畑汀子・金子兜太・沢木欣一監修
『カラー版 新日本大歳時記 愛蔵版』（講談社）
ISBN978-4-06-128972-7

『角川俳句大歳時記 新年』（角川学芸出版）
ISBN4-04-621035-4 C0392

『角川俳句大歳時記 春』（角川学芸出版）
ISBN4-04-621031-1 C0392

『角川俳句大歳時記 夏』（角川学芸出版）
ISBN4-04-621032-X C0392

『角川俳句大歳時記 秋』（角川学芸出版）
ISBN978-4-04-621033-3 C0392

『角川俳句大歳時記 冬』（角川学芸出版）
ISBN4-04-621034-6 C0392

本間美加子
『日本の 365 日を愛おしむ』（東邦出版）
ISBN978-4-8094-1652-1 C0076

参考サイト：フリー百科事典ウィキペディア (Wikipedia)

最後までお読みいただきありがとうございました。

(株)技術情報センター メルマガ担当 白井芳雄

本メールマガジンのご感想や本メールマガジンへのご意見・ご要望等 melmaga@tic-co.com まで、
どしどしお寄せ下さい。

株式会社 技術情報センター 〒 530-0038 大阪市北区紅梅町 2-18 南森町共同ビル 3 F TEL : 06-6358-0141 FAX : 06-6358-0134 E-mail : info@tic-co.com
